

レバノンから見えてくる中東

白杵 陽

二〇一四年二月下旬、レバノンの首都ベイルートを三年半ぶりに訪れた。かつては「中東のパリ」として繁栄したが、一九七五年に内戦が勃発して一九九〇年まで続いた。現在も政情は不安定である。レバノンは中東政治を映す鏡で「中東の縮図」ともいわれる。

今回のレバノン訪問直前にもシリア内戦と絡む事件が起こった。レバノンのシリア派武装組織ヒズブッラー（神の党）はアサド政権を支援するためにシリア内戦に参加しているが、レバノンのスンナ派の「アル・カーイダ」系組織がヒズブッラーとその背後にいるイランの関係施設を攻撃した。二月一九日、イラン文化センターが爆破されたのであるが、昨年一月一九日にもイラン大使館が爆破され、二三名が死亡した。犯行声明によれば、ヒズブッラーがシリア内戦に加担するかぎり攻撃を続けるということである。

二〇一三年夏以来、イランとアメリカ合衆国との間の関係改善の兆しが見え始め、さらにシリア内戦をめぐるてもようやく当事者間の協議が始まったが、今回の事件は新たな動向への不満の表明といった文脈で考えることができよう。スンナ派とシリア派という宗派対立の名目の下で、いったい誰がシリア内戦の継続を望んでいるのかを考えざるを得ない。

レバノンにしろ、シリアにしろ、一般の人びとは戦闘にはいいかげんうんざりしている。にもかかわらず、暴力行為は宗派間の争いのかたちを取りながら終わる心配がない。私自身、帰国時ベイルート空港に向かう途中、車の運転手が観光案内さながらに、辟易した感じで、爆破があった大使館はここに、

といった説明をしてくれた。ベイルート南部にある空港はシリア派ムスリム住民が多く住む地域である。イスラエル軍が二〇〇六年にヒズブツラーによる攻撃への報復として無差別爆撃をレバノン全土に行った時も、空港とともにこのシリア派地域が空爆の集中的な対象となった。件の運転手もシリア派ムスリムなのである。

この運転手はいろいろと話してくれた。二人の娘さんはカナダのモントリオールとアメリカのシアトルに移民しており、年に一度帰国するので、その時が楽しみだとうれしそうに話す。だからといって本人自身はレバノンから離れるつもりはない。生活の場はレバノンしかないと考えているからである。レバノンは一九世紀末以来、他の地中海周辺諸国と同じように数多くの移民を海外に送り出している移民国家でもある。この移民という現象はキリスト教徒やムスリムといった宗教・宗派の違いを越えて共通している。人びとの関心はいかにして経済的に安定した生活を手に入れるかである。移民もその目的達成のための一つの手段にすぎない。政治が不安定なだけに人びとも家族の生活をいかに守るかということにその関心を集中せざるを得ないのである。

レバノンでは長い歴史を通じて、レバノン山脈の谷間の町や村ごとに宗教・宗派の違う独特の文化を育ててきた。第一次世界大戦後、フランスの委任統治が始まって近代ヨーロッパの国民国家型の政治制度が持ち込まれて、その特色を生かした見事なといっているような宗教・宗派体制に基づく議会制民主主義制度を作り上げた。一九七五年にレバノン内戦が勃発するまではレバノンの民主化モデルはアメリカの近代化論の文脈でも中東における数少ない成功例としてもはやされた。その優等生的な政治制度が内戦でぼろぼろになってしまい、今日に至るまでその破綻から回復していないのである。

もちろん、安定した制度や秩序が崩壊するには複数の諸要因が複合的に絡んでいることはいうまでもない。しかし、重要なことは国家という枠組みだけは機能不全に陥っても維持されている点である。グローバルな問題とローカルな問題の交錯するレバノンのような紛争事例は、中東地域研究者に方法論的な課題を突き付けてくるのである。